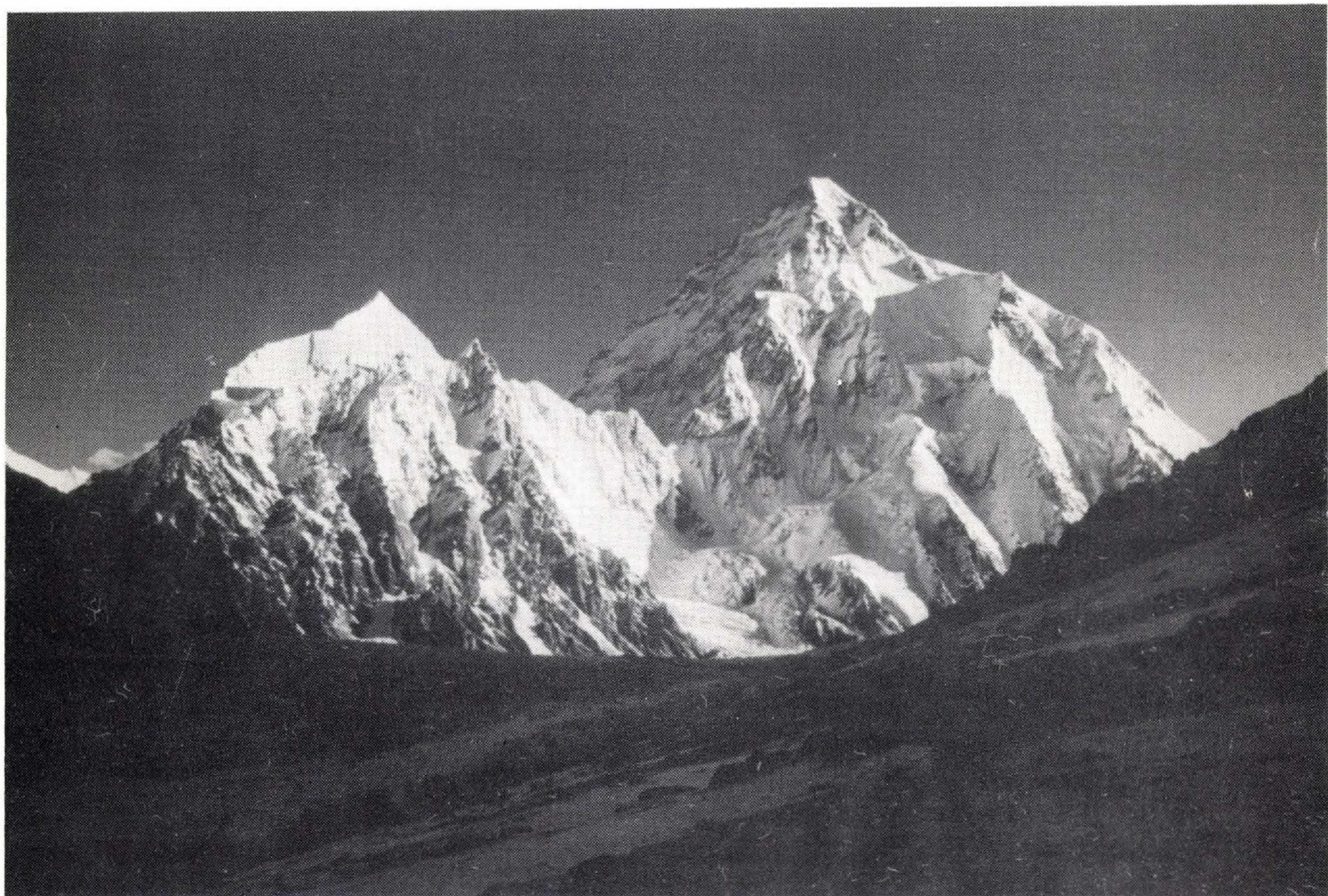


針葉樹会報

復刊第51号



1977.12

表 紙 の 写 真

エンジェル(6855m)とK2(8611m)の朝

ブロード・ピークBC付近より～吉沢一郎撮影－6.16.77－

目 次

K2行を含めた以後の身辺雑記(一)
ヌクイ谷を登る

清水谷遡行

白馬主稜行

甲斐駒追悼碑建立報告

ケニア山レナナ峰、一九七七年
—高度障害の経験—

フランスとエドワード

松 佐	西 牟	金 兵	柿 吉
田 藤	牟 田	子 藤	原 沢
重 活	伸 晴	元 謙	一 郎
明 郎	一 彦	史 一	郎
⋮ ⋮	⋮ ⋮	⋮ ⋮	⋮ ⋮
14 11	9 6	3 2	1

K2行を含めた以後の

身辺雑記(一)

吉沢一郎

編集子は私に、今度のK2登山隊について今まで何處へも発表しなかつたことを何か書いて下さい、と注文してきた。私はあのBC(五二〇〇mとも五一〇〇mとも五〇〇〇mとも、そして四九〇〇mともいうが)に六月十六日に辿り着き、七月の六日の昼少し前に下山を始めたので大凡そ二十日滯在していたことになる。

羽田を出たのが五月九日午後一時四十五分、そしてピンディ着、自分の時間で矢張り一時四十五分、現地では多分十日、の午後九時四十五分であつたろう。それからK2BCへ行き、同じルートを戻り、ピンディ、ペシャーワル、ハイバー峰、ピンディ。次いで空路チタル。ピンディに舞い戻つて八月七日夜十時三十分離陸、北京経由で羽田着が九時五分

(東京時間午後一時五分)。小雨が降つていた。東京はピンディより暑いぞとおどかされていたので大助かり。東京ではそれから二日間雨が降つていた。

パキスタンには丸三カ月いたことになる。私はその間ずっと電通の手帳とは別の帳面に日記をつけていた。それが都合四冊になることになる。

最後のは前の三冊より少し長く大きい。しかしその表紙の青色はやや褪せ、周囲はキチンとした直線ではなく、さざくれのようになつておる、表面の金文字も水で半分消えかかっている。これには私が九死に一生を得た苛しい思い出が掲んでいる。しかし説明すると長くなるのでこゝでは省いておくことにしよう。

この私の日記には遙かの雲上に聳えていたブロード・ピークのことだと、クリンチと

縁の深いマシャーブルム、湯浅君らの失敗したムズターグ・タワー、その他バルトロ氷河を遡つて行つた時に望見した巨峰、難峰についての感想がいろいろと書き記されているが、同時に人間についての観察も微に入り細に亘つて書きとめてある。

面白いと言えば山よりも寧ろ人間に注目している方が興味があるとも言える。平林克敏君の書いた手紙がK2BCに回送されてきたことがあるが、その中には非常に参考になる苦言やら忠告やらが幾つか書かれてあつた。

少なくとも私に関する限り隊員の観察は、ホテルにいる時、キャラバン中、そしてBCにいる間に充分に行なうことが出来、それを私は克明に手帳に記しておいた。これらを一まとめにして、秘録集とか自戒集などと銘打ち、一冊の本にはならないまでもパンフレットなどにして出版したら面白いと思うし、大いに参考になると思う。人間の本性というものはいくら隠そうとしても駄目で、その気になれば片言隻句や一つの態度からさえわれわれはそれを擱むことが出来るのである。

しかし私は今それを直ちに公にしようとは思わない。しばらくすればわれわれのK2に対する一般的の批判がどんなものであるか、公平な第三者がどういう態度に出てくるか、それらは順々に私の眼や耳に入ってくると思う

うので、私のシヴィアーナ考え方との比較は

そのあとでやつても遅くはないと思つてゐる。

いざれにしろ日山協主催の一九七七年度K2登山隊は一応成功したと言つてもよいと思

うし、私自身も皆に労わられながら、そして

私自身も苦労しながら、BCに達しそこに三週間滞在し、周辺の大岳と親しんできたのであるから大いに満足している。

そればかりではない。私はこれで一応カラコルムと、それに帰国直前に自分一人で行つたハイバー峰と、ブルハン・ウディンさんに案内されて行つたカフィリスタンその他を加えることが出来たので（ティリッチ・ミールは高く巨大で印象的であった）、もうこれ以上言つことはない。

私も満七十四才の道標を過ぎた。今後は日本の低い山々を気ままに歩き、先輩や良識あ

る岳人の御高説に耳を傾け、洋の東西を問わず私の好きな本を読み、山と共に生きる道を考え、そして自由に静かに思うことを書きつはあるが、余り世に憚ることなく、幾ばくもないであろう余生を山一筋に送りたいと念らねていきたいと思う。

アンドレー・ジードも言つてゐるではないか。「美しく死ぬことはやさしいが、美しく

老ゆることは難しい」と。私にこの難しいことが出来るかどうか甚だ疑問とするところではあるが、余り世に憚ることなく、幾ばくもないであろう余生を山一筋に送りたいと念願してゐるものである。

（五二・一一・一三記）

ヌクイ谷を登る

柿原謙一

今年の夏山は黒四ダムから入つて、赤牛岳をねらつたところ、有力ポーターの脚の故障で入山日に平ノ小屋先にあるヌクイ谷川原に幕営となつた。

夕食となる。一行は山田さんはじめ八名。水割りウイスキーがおいしい。このとき明日はヌクイ谷を登つて五色ヶ原にて、友田さんの碑を廻り即日キャンプ地に降ろう、といひやかされた。

この川原も同様であったが、これまでに通つてきたタンボ沢・御山谷・中ノ谷も、昭和四十四年八月上旬の豪雨と土砂流出の爪あとを歴然と残していた。黒部は変つた。この言葉は平ノ小屋管理人の名言である。

夕食前に釣竿を振つて岩魚を狙う。湖はさけて川瀬を釣る。ところが格好の淵はないし、

ごろごろ石の瀬ばかりで、岩魚のすめそうな

めざめると残月がきれいであった。ヌクイ谷の雪渓が光ってきた。脚痛の一名がテント

番を引受けてくれたので、軽装で歩きだす。

遡ること一時間、ことごとく流出土砂のゴロゴロ石で、おまけに両岸に崩壊箇所が多く、無気味な川原歩きであった。やがて碧淵うちつづく沢の相があらわれた。岩魚釣はここからであろう、足跡が明瞭にみられたし、遺失した手網もあつた。

渡渉は痛いほどつめたかった。高度一、八〇〇米あたりで少憩し、つづいて滝を高巻いてから鳶山側よりくる小沢をわたり、やがて雪渓にとりつけた。雪渓中段で昼食をとり、越中沢岳と鳶山の間の最低部に登つて縦走路に合したのが午後一時。出発してから六時間余を要した。健脚の倉知さんにとっては、じれったかったにちがいない。

ここで友田さんの遭難した越中沢岳南側の稜線を、山田さんが教えてくれた。当時在京していたとはいえ応召中であった私は、なにもできなかつた。軍服で日本橋の友田家を弔問した日の記憶が甦つた。あの日の西日は暑かつた。越中沢岳に向つて目をとじる。

鳶山の頂はお花畠で美しい。五色ヶ原の雪

田はお花畠をくぐりせせらぐ源流をおこしている。友田さんの追悼碑のある五色小屋を廻つていては、平のキャンプ地に着くのが暗くなりそうだ。原の南側から碑のある地点に対して黙悼する。白山風露やチングルマがこんなに美しいのに、若くして山に逝いた人は現身もてこの大草原を眺めえないのである。

胸中のどこかにうずいていた追悼行を、なんとか果せたので、気ままに五色の大草原をくだる。若い人は先にドシドシ降つてほしい、わたしはマイペースですよということになる。休山記どころか、健脚復調の山田亮三氏は親切にわたしと一緒に歩くという。有難いし恐縮だったが、おかげで刈安峠までの間で中川孫さんの想い出話がでた。雨の中での道を降つた日の話であった。

キャンプ地に着いたのが六時に近かつた。テント番を引き受けてくれた仁は、平ノ小屋で求めおいた缶ビールをよく冷やしておいた。その味は本当においしかつた。奥黒部の山毛櫸林は盛夏の緑に夕涼の趣をそえていた。

その夜は伴と二人で外寝をする。翌朝は早

立ちで南沢にむかう山田・倉知一行と別れて、再び黒四ダムサイトへの道をとつた。

清 水 谷 遊 行

兵 藤 元 史

黒部川とその支流の美しさは、冠松次郎氏の文章を持ち出すまでもなく、広く世に知れ渡っている。私にとつては今回の『祖母谷の本流清水谷遡行』が、黒部とその支流の美しさに触れる初めての山行となつた。そして清水谷は、充分に僕等の期待にこたえてくれた。三日間続いた好天は、清水谷の暗い廊下とそれに続くガラガラの谷相の持つ、陰惨な雰囲気をやわらげてくれ、源流部での解放感を倍増してくれた。

清水谷の良さは、おそらく、暗く荒れはてた中流域と輝く草原の源流域のコントラストの強さだと思う。その印象のみ強く、ディテールは既に忘れかけているが、できるだけ思い出しながら、この山行記を記してみたい。メンバーは、前神さん、藤本さん、それに私

の三人。

九月十五日 雨のち晴

魚津駅に降り立った時には、どしゃ降りの雨であったが、宇奈月で時間をつぶし、お猿の電車のようなんびりとした黒部峡谷鉄道で櫛平まで移動しているうちに、太陽が雲間から顔を出し、そのうちに雲も散って大快晴となつたのは、幸運だったとしかいよいうがない。あのたたきつけるような雨を見ては、沢に入つて行こうという気も失せかけ、僕等は半ば真剣にザックから地図を引っ張り出し、他所への転進を考えていたのである。というのも、数少ない清水谷の記録によれば、実働四日は最低必要らしいというのに、僕等はギリギリ四日の休日しか持つていなかつたのである。

しかし晴れてしまえばしめたもの、先程までの重い気分はどこえやら、持時間が少ないと、いうことも頭から消えて、祖母谷温泉では一時間以上ものんびりとしてしまつた。藤本さんにいたつては、野天風呂に入つて、鼻唄もでるといふ始末。

ともかく、十三時前頃、出発となる。二〇分程右岸の林道を歩き、名剣沢に出合つた地点でいよいよ沢に入る。水量はなかなかのものであるが濁つてはいないので（ここより下流は工事の為、濁つてはいる）徒渉にはさしつかえない。三人して肩を組んだり、手ごろな棒を横にわたしたりして徒渉を何度も続けるうちに、最初の廊下となる。

基本的に高捲きは避けようということで、ザイルを出して胸までつかりながら、右岸をへずり始めた。心臓のあたりが、冷たい水に触れてキュッとしまる心地はあまり良いものではないが、自分達でルートを先し出していく氣分の方がそれを上回つて、僕等を満足させる。案外容易に、第一の廊下を抜けた。

河原をしばらく行くと、沢がノドのようにせばまり、四m程の滝がかかる。その先はまた河原なので無理やりパスしようとしたが、水勢が強くてダメで、やむなく右岸より捲いた。簡単に捲けたはずなのに、山行中一回は岳は忘れ去られていたようだ。

さらに三十分程歩き、気持の良い砂洲にツエルトを張つた。そしてその夜は久し振りに大きな焚火を囲んだ。

櫛平（二・〇〇）—祖母谷温泉（二・四〇）—T・S（一六・三〇）

別段落ちても危険なところではなかつたので、後は藤本さんと私二人の咲笑が谷間に広がつただけであつたが……。

第二の廊下は最初のものよりも長かつたが、ノーザイルで通過できた。どこをどう通つたのかは、もう憶えていないが、廊下が終ろうとする所で、十m程の滝に出くわした時のことは鮮明だ。前神さんが、この滝の偵察にて残つた二人がふと振り返ると、沢の下流方向の狭い空間の中に、剣岳の毅然たる姿を

『発見』して、僕等は声を上げてしまつた。祖母谷の位置関係からして、剣岳が見えることは当然なはずであったが、このような廊下で一見通過不可能な所をルートを捜しながら遡行することに気持を集中していた為か、剣

九月十六日 快晴

昨晚の星が約束したように今日も快晴。絶好の沢日和りとなつた。もつともそのために、シラフカバー一枚では寒さがちよいと身にこたえはしたが。

三十分で西の谷出合。本流には滝が連續してあらわれ、左手より乗越す。一時間で硫黄沢出合。かなり水量も減つて徒渉も楽になつてきた。

「僕等は大分早いペースで進んでいるんと違うか」、「ひよつとしたら三日で抜けられるかなあ」、「そしたら松本の兵藤の家に寄ろうぜ」、「核心部はまだだからどうかなあ」などと話しながら、それでもあくまでのんびりと行くうちに、正面に大きな岩壁が見えてきた。左手には清水岳の稜線が見える。いよいよ核心部だ。

大きく広がつていた本流が右に屈曲すると、四十m程の滝が目に飛び込んできた。左右を高い岩壁に囲まれて、ドゥッドウッドと水を落している。とても登れそうにない。少し戻つて、左岸のルンゼ状の所から高捲くことにした。七十八十m登つて、小屋根をトラヴァー

ス氣味に乘越し、傾斜のゆるい草付きを下降する。ザイル二ピッチ下り、沢を覗き込むと、第一の滝は五段で形成されていてまだ続いており、しかたなく、もう一ピッチ右ヘトラヴァースして沢に降り立つ。この間約二時間。

その地点は、沢巾約三m、水は岩をうがつて流れている。すぐ上部で右に屈曲しており、先はどうなつているのか判らない。

それにしても、記録というものは良し悪しだと思う。先の判らない深い廊下の中にちゅうちょなく降りていけることは、曖昧とはいふかなあ」、「核心部はまだだからどうかなあ」などと話しながら、それでもあくまでのんびりと行くうちに、正面に大きな岩壁が見えてきた。左手には清水岳の稜線が見える。いよいよ核心部だ。

屈曲点を右に曲がると、第一の滝に勝るとも劣らない立派な滝が落ちていた。これは右側壁の斜上するバンドを利用して、二ピッチで落ち口に出る。右岸は二百m近い圧倒的な岩壁で、一条の水が落ちている様は實に見事だ。

出発（六・三〇）—硫黄沢出合（八・〇五）—広河原（一〇・〇五一—・〇〇）—第一の滝（一一・二〇）—第二の滝（一五・〇〇）—IT・S（一六・三〇）

程度ですらも、とてもこんな氣楽な氣持で廊下の中へおり立ち、遡行することはできなかつたろう。本当に天候に恵まれたと思う。

そこから上流は幾分右岸の傾斜もゆるみ、

五七mの滝をいくつか簡単に越した。大きく沢はさらに左へ曲ると、ガラガラとした谷相になつた。縁がなく、索漠とした所だ。滝谷のC沢右俣奥壁のような岩壁を正面にみる、荒れた谷間の小さな平地にツェルトを張る。

その夜は、左右のそそり立つ岩壁によつて、本当に小さくなつた空にひしめきあう星を眺め、昨夜よりは小さかつたけれどその場の雰囲気にはピッタリの焚火を囲んだ。荒れたガラガラな谷の様相は闇に沈んで、黒々とした周囲の岩壁と、その上の小さな空のこぼれんばかりの星と、僕等の小さな焚火だけが全てだつた。

はるか上部の稜線に朝の日があたり始める頃出発した。いくつかの容易な小滝を越し、相変らず荒れた谷を登つて行くと、しばらくして左右の傾斜がゆるみ、目の前が扇状に開けた。その真中に五十mの滝が中空にしぶきをあげながら堂々と水を落していた。おりから朝日にはえて、とても美しい。これは地図に出ている滝である。この辺から、樹木が現われ、鉱物の世界を脱した気がした。

右岸の草付きと灌木の斜面を登つて滝の落ち口に簡単に降り立つ。もう、そこから上には、それまでの清水谷のもつ荒々しさではなく、源流域に入ったと思わせる小滝群が、這松と奇岩の中に続いていた。水は軽やかに、躍動感をもつて流れ走っていた。

そしてその先の屈曲点を曲ると、水の流れはまるで手品のように勢いがおさまり、砂地の間をサラサラと流れていた。吹く風も、空の青さも、色付き始めたナナカマドも、全ては秋の気配だというのに、僕の頭には「春の小川」のイメージが浮んできた。そして、それと同時に、沢も視界もパット開けて、白馬

の稜線が、杓子のあのトラヴァースルートの白い砂地が、その下に広がる豊かな草原が、そして足下の『サラサラ』といく『可愛らしい』清水谷が僕等のものとなつた。

それにしても自然の妙とは本当に素晴らしいものだ。ついいましがたまで歩いていたあの荒涼とした清水谷が、こんなにやさしく、たおやかな様相に変化するなんて（しかもこんなに突然に）、一体唯が信じられようか。

僕等は当然のようにこの素敵に気持の良い場所に坐り込み、二時間近くも動こうとしなかつた。そしていざ腰を上げても、さわやかな秋の気配の感じとれる、風と太陽と草原の中に、ころがり込んで休んで、清水谷の美しさを誉め、あるいは立ち止まって剣岳を眺め、稜線までことさら、意識的にゆっくり登つて行つた。

正月山行では白馬の雪の深さをいやという程知らされたものの一帯の地形となると未だ皆目見当がつかない。大体入山中を通して五十米以上の視界のあつたためしが無い。

「双子尾根を登らなければどうにも話にならんでしょう」前神君の言うとおりだ。新宿の西口ガード横で大酒を飲んで結団式を行い、三月末の連休に再び双子尾根を登ることとなつた。今回は藤本君のかわりに加藤君が、それにある南股入りまでリヒトをつけて歩くといふ形でまわつて來たが、あの別天地での数時ある南股入りまでリヒトをつけて歩くといふ形でまわつて來たが、あの別天地での数時間に較べればなんでもないものだつた。

全員、朝八時の梓に乗りこにして分れたところが車内はスキー客で一杯で顔が揃つたのはようやく大町をこしてからだつた。

別天地・二俣（一一・二〇・一三・〇〇）—白馬岳頂上（一六・一五）—猿倉（一九・〇〇）—南俣（二〇・一〇）

白馬主稜行（二）

金子晴彦

それでも登山者は正月より少く、猿倉山荘は未だすっぽり雪に埋れて無人だった。

雪はしまってどこでも楽に歩けるのがありがたい。てんでに登つて山荘のやや上方にベイスキャンプを置いた。

翌朝まだ暗い四時半に出発。樹林をぬけた

頃にあたりは明るくなつた。ところが極めて濃密なガスがたちこめている。黒い闇が白い闇に変わつただけとでも言おうか十米も離れるともう前に行く某氏の姿が白くかき消えてしまう程だ。しかも、正月には平らな雪原だつた筈のところは、例の長走沢からのいかにも巨大な雪崩に埋め尽されてすっかり様相を変えている。土手の様に盛り上つたでぶりを乗り越えて雪崩の跡に入り込むとブルドーザーで強引にならしたような異様に平たい雪面がある。その所々を鋭く長い傷が走っている。大量な雪塊が凄い勢いで駆け抜けていった跡に違ひない。その流れが何かの都合で阻まれた所では累々たるでぶりが小山をなしている。雪面の状態からするとそんなに古いものとも思われず、白く凍りついてガスに閉されてい

る漠大なエネルギーの残骸は今にも再び動き出しそうである。

さて、その只中でどちらに向かえばよいのかさっぱり分らない、それどころか前後、左右そして上下迄が真白で下手をするとその区別さえ見失つて昏倒しそうだ。

これに加えて一帯に最もくわしい某氏の意外な登高意欲が事態を増々混乱させることとなつた。年来の御目当のすぐそばに来て某氏の足はどうしても雪崩の落ちて来た方向へと、つまり主稜の取付の方向へと向つていたらしつまりとしてままさかそうとは分らないのだ。こちらとしてはまさかそれを名実共に自分のものにしないから「変だなあ雪崩を横切る筈だがなあ」程度でひたすらついて行くばかりだつたがいささか度がすぎる、どうしたつて方向が違う、「一体どこに行くんですか」休んだ時に何とも珍妙な質問をする羽目に陥つた。某氏はす

「あとで登れば良かつたなんて言つたつて知らんぞ」相當に登りたいんだなと気がとがめるがそれも某氏一流の合意の表現とうけ流すこととした。

「あとで登れば良かつたなんて言つたつてかさず「主稜だよ」と言う。若い三人は愕然とした。だからこそ昨夜、明日は十四時間歩くことになるなんて大袈裟なことを言つていたし、大体新宿での結団式の折にも主稜といふ発言が多かつたわけだ。

一体どう対処したものかと迷つたが口をついて出てきたのは「そんな約束じやがないでしよう、在京先だって双子尾根と了解してますよ」との顔ひきつらせての冷淡な物言だつた。前神、加藤両君は気まずい様子であつちを向いている。

しかし何が何でも今日は双子尾根だ、今主稜に向かつてもこのガスでは取付さえも分るまい、又、もし登れたとしても、それでは主稜はどうも借物で終つてしまいそうである。きっかけとしては借物でスタートしたものの一いつの間にかそれを名実共に自分のものにしたいという誘惑に抗し難い。

「あとで登れば良かつたなんて言つたつてかさず「主稜だよ」と言う。若い三人は愕然とした。だからこそ昨夜、明日は十四時間歩くことになるなんて大袈裟なことを言つていたし、大体新宿での結団式の折にも主稜といふ発言が多かつたわけだ。

出発だ。今度は方向を変えて雪崩の跡を横切つてゆく。急いで小日向のコルへの斜面をさがし、双子尾根に足を踏み出さなくては気まずい雰囲気が和みそうもない。気が氣でない思いでガスをすかして見るが時折雪の色が

変わつたりしてあたりはこの世の景色とも思われない。

しかし、どうやら方向は間違つていなかつた。しばらくするとようやく雪崩の跡が途切れやや上方に特徴のある樺の木が幻のように現われた。コルへの急斜面の目印である。いくらか救われたような思いでがむしやらに直登を始める。

しかし、コルに到り、双子尾根を辿り始めてもガスは一向に晴れそうもない。おかげでこちらの気も晴れない。黙々と歩くばかりで一帯の地形などいよいよもつて分らない。

それが、樺平のすぐ下迄来た時、ラストを歩いていた某氏が突然大声をあげた。終に雷が落ちたかとビクッと首をすくめたがどうも「出たぞ」と言つたらしい。熊でも出たかとやおらあたりを見回すと前方のガスの切目から青空を背に沁み入るように白い杓子岳が一瞬姿を現わした。思いがけずガスが切れ始めたのである。「やつた、やつた」血がどつと湧き立つような思いだ。

登るにつれガスは見る見る晴れてゆき、樺

平を見下す稜線に立つと僕等はもう雲上の銀世界の只中にいた。突然解き放たれた色彩は正月以来白い闇に閉されていた目には痛い程度に現われた。コルへの急斜面の目印である。

だ。

皆は思い思いに樺平へと下り始める。その合間に辛うじて姿を認めた樺の木が形の良い枝を太陽に向つてひろげている。銀色に光る

浅いトレースは樺の木のくつきりと黒い影をぬけ、まるで易々と向い側の急斜面を青空に向つて登つている。背後では戸隠が雲海で泳ぐ、主稜は主峯直下の二段の急峻な雪壁をどうだと見せつけている、白馬鑓の温泉場はそこだけ雪が溶けて黒々とした地肌を見せていく。北稜は形の良いクリスマスツリーだ。

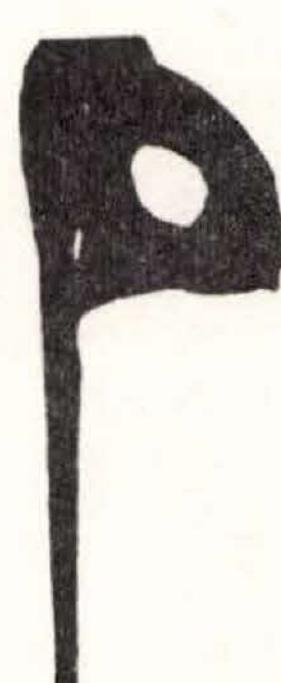
この同じ尾根で雪にまみれあれ程苦しんだとは何とも夢のようである。

結局その日は某氏の予告通り十四時間近く歩かされた。樺平から途端に急になる尾根をつめて見事に雪庇の張り出した杓子岳へよじ登り、やたらに長く感じられる稜線を辿つて白馬主峯へ、いつ雪崩れるかと気が気でない

思いで大雪渓を白馬尻へ、そして下るにつれ再びあたりを埋め尽す濃密なガス、肝心な主稜の取付はおかげで見当がつかず、それどころか正しい方向に下つているのかどうか絶えず気にする苛立しい作業が一挙に疲労をつづらせる。

最後のピッチを這うようにしてベースキャップに戻った僕等はその晩の為にたっぷり残しておいた酒を飲む気力も無く早々にシュラフにもぐり込んだ。

翌朝、谷間のガスも晴れ、下り着いた二股の橋の上からは正面に不帰Ⅱ峰の勇姿が望まれた。こうして僕はようやくにして主稜をめぐる白馬周辺の山々をつくづくと目にすることができた。



甲斐駒追悼碑建立報告

西牟田伸一

昨年も会報（76年12月号）にて、追悼碑建

立計画を報告致しましたが、今般ようやく完成する事が出来ましたので、ここに報告させて戴きます。追悼碑の建立は我々の永年の念願でしたが、こうして無事完成出来ましたのも偏に様々な形で援助戴いた先輩諸氏、学生諸君のお蔭であり、報告に先立ち深く御礼申し上げます。

追悼碑の設置場所の選定と土台作りは昨年迄の山行で終つていましたので、今年の作業はデザインの検討から始まりました。当初、甲斐駒遠景をバックにしたレリーフを考え、色々と写真集などを探しましたが、適當なものがなく、結局金子の創った詩の一部をレリーフ化する事にしました。ここにその詩を掲げます。

往きかわん

時折りは

あの言葉

歓喜を絆に

（追悼集『赤石沢』参照）

この詩をどなたに書いて戴くか考えました
が、事情の分った人にお願いする事にし、望
月会長の御手をわざらわせました。会長の筆
は豪毅な中に優しさがあり、レリーフの完成
品を見た時、自分達の事ながら少なからず誇
らしい気分でした。レリーフ完成の7月末か
ら、準備作業が忙しくなりました。遭難当时、
お世話になつた方や橋本君の友人達に除幕式
への御誘い、会員各位への資金的援助のお願
い等の手紙を書く一方、橋本家を訪ね、レリ
ーフを見て戴き、御遺族の除幕式への参

加を御説明しました。（御父上はこの数年来
足を痛めておられ、今年も完全には治つてい
ないとの事で、又他の御兄弟達も夫々都合が
つかず、結局今年の参加は得られなかつた。）
当初、取り付け作業は除幕式と切り離して
8月20日頃学生の協力を得て行なう積もりで
したが、台風の為、除幕式と併せて行なう事
になりました。其の後、倉料の買い出し、装
備の調達を済ませ、出発の日を待ちました。
以下、日を追つて日誌風に書く事にします。

八月三十一日 晴 神谷君（遭難当时一年
生で其后退部、現在旭硝子㈱国際部勤務。）
が私の家に早朝、車で迎えに来る。国立部室
で打ち合わせ通り、装備と共に待機していた
学生二人を乗せ、一路甲府へ。甲府で県庁、
韮崎で林務事務所に夫々立寄り、国立公園内
に人工物を設置する事の認可手続きを終えた。
この日は竹宇登山口に車を置き、かいもち石
のテント場で幕営。同日夜、金子他学生三人
の先発B隊新宿発。

九月一日 曇のち時々雨

A隊は五合を経て七合テント場へ。途中、

五合ハシゴ段でB隊の五合小屋着を確認。

午後、AB両隊合流。早速設置予定のケルンに向かい、取付作業。

九月二日 曇のち時々雨

C隊は早朝新宿発。この日は五合小屋迄。先発隊のうち学生三人は下山。北岳バットレスへ向う。残りの先発隊は引続き取付作業。昨年作った土台の上に新たに荷上げした五〇

Kgのセメントを使ってレリーフを嵌め込む台

座を作製。午後になつて無事レリーフを嵌め込んだ。作業完了後、西牟田だけC隊確認の為、降る。午後三時頃刀利天狗で登ってきたC隊を確認。急に降りだした豪雨の中七合へ戻る。作業も終り、参加者も揃つた事から今回の行事九〇パーセント成功と金子と喜びあ

う。

九月三日 晴のち曇夜に入つて雨

先発隊は再度ケルンに登り、レリーフの廻りの整備、除幕式の最終準備を終え、C隊を待つ。両隊合流して高速ケルンへ登り、除幕式を行なう。金子挨拶、望月会長の言葉の後、山讚賦合唱、ビールで歓杯、記念写真と続き

無事終了。其の後、八合ヘリポート迄散策し、テント場へ戻り、昼食。午後は頂上へ行く者、昼寝をする者等各自、自由に過ごす。夕食后

は全員一方のテントに集合して酒をくみかわし、歌を唱つたりして楽しい時を過ごす。特に海老原さんの詩吟「川中島」が山の静けさの中、ひと際素晴しかった。

九月四日 晴

学生二人は白根三山縦走の為、頂上へ。

本隊は下山。途中、七合と五合の小屋へ寄り、本山行中世話になつた高木さんと五合の小屋番氏（古屋さんは日本山岳写真集団の会合の為上京中）に挨拶し、レリーフの保全等を依頼した。下山道は横手にとり、無事韭崎駅頭で解散。

以上が今回の行動の概要ですが、今更乍ら

山を通して結びあつた人々の心の暖かさを感じているこの頃です。尚追悼碑はブナの木影

で丁度坐つて休めるような具合になつておりますので、甲斐駒登山の節は是非御立寄り下さい。場所は七合から約三十分登つた森林限界のやや下です。

最後に今回の山行の参加者と御寄付下さった方々の御名前を記します。

△山行参加者▽ （敬称略）

海老原秀夫（橋本君の中学時代の友人）

平井準一郎（外語ワングルOBで清富会幹事として橋本君と親交があ

あつた。）

神谷雅行（前述）

（針葉樹会員）

望月達夫 中島寛 中村雅明 傑昭

井草長雄 藤本敏行 金子晴彦

西牟田伸一

（学生）

近藤泰 中西茂 引地真 岡部寛史

石川由美

△御援助金▽

望月 達夫 一万円

岩崎 利一 一万円

石 弘光 一万円

中島 寛 一万円

俵 昭 五千円



除幕式(金子 52. 9. 3)

竹中	山本	尚禎	三千円
長沢	道彦	三千円	
藤巻	悟	二千円	

ケニア山レナナ峰、一九七七年八月

高度障害の経験

佐藤活郎

八月五日、ウガンダからケニアに戻り、ナイロビの青木氏宅でテント生活をしながらケニア山行の準備をした。十日午後、ナイロビ

を乗り合いタクシーで出発、夕刻ナロモルのナロモルリバーロッジ着。ここはケニア山の登山基地でありここに泊る。

八月十一日 晴後雨

九時ロッジ発。チャーターの車で国立公園のゲート(入山料を払う)を抜け、 $3000m$ 近くまで上る。十一時、ガイドのフランシスとポーターのエドワードを連れて歩き出す。

森林帯を抜けた泥濘帯で氷雨にあい近くの岩小屋へ避難した。標高は約 $3500m$ 。止みそうにないので、我々はここにテントを張りフランシス達は $3300m$ にある小屋に返す。夜、周りで動物の気配がする。ここはアフリ

カのジャングルがすぐ下にあるので安心はできない。

八月十二日 晴午後氷雨

ポーター達が上ってくるのを待つて八時出发。後から二人を観察しながら歩く。ガイドのフランシスは二六歳、頭の回転が速く英語もうまい。ポーターのエドワードは二一歳、まだ経験が浅いらしく、次第に遅れ気味になる。フランシスはそんな彼の荷を減らしてやつたり、面倒見がいい。二人とも地元のキクユ族の若者だ。

十二時半、岩と雪の鋭峰を望むテレキ小屋(四一五m)着。歩き足りなかつたが行程が半端になるため行動を止める。二時頃から氷雨が始まり、しばらく続く。レナナ登頂ならず下山途中のフランス人ペティと同宿

となる。夕食は普通に食べられたが、夜間、何度も息苦しくて眼がさめる。頭痛もしあげる。

八月十三日 快晴後晴

食欲なく、ビスケットを少し食べただけで七時出発。ガイド達は持参のチャパティを食べてている。

開けてきたテレキ谷の平原をしばらく進みテントの林立する「マッキンダーズキャンプ」(四二〇〇m、ボーター達のたまり場)を過ぎる。いよいよ上に見えるルイス氷河の末端のモレーンの急登にかかる。

胸が異常に苦しい。フランシスはひんぱん

に短い休憩をとる。最終キャンプであるトッ

プハット手前からぼくは三人に遅れるようになつた。あえぎつつアーサーファーミン記念小屋に荷をおろす。十一時、四七九〇m。

空身のまま二人でレナナ峰往復に出発。一

〇分程で氷河の雪を踏むようになる。富士山のような広大な斜面の上方に先行の登山者がポツリと見える。いつにない胸の苦しさにぼくは体の異常を感じる。後から考えればこの

時すでに肺水腫の初期に入っていたのだろう。幸い技術的には容易であったので一時間足らずで岩の露出したレナナ峰(四九八五m)に着いた。ぐるりを見回し、写真をとつて下山にかかる。足に力が入らない。さしてハードワークというわけでもないのに。

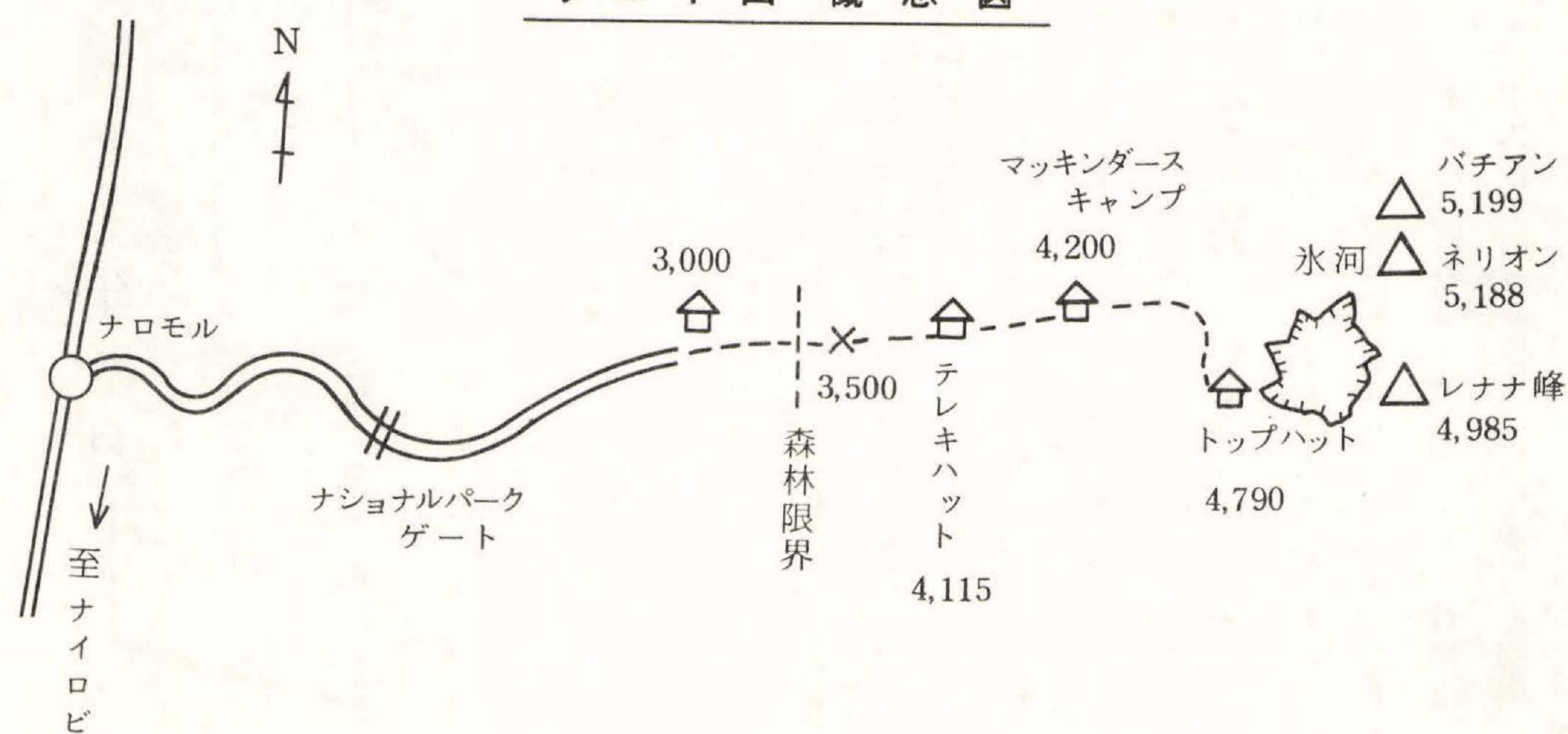
一時半小屋に戻る。寝て過す。全く食欲がない。

(結局、この日の朝から二日半ぼくは何も食べることができなかつた。) フランシスは心配して降りた方が良いといふ。とにかく明朝まで待つてみて、明日の予定を決めてることにした。頭痛と吐き気に悩まされつづけ夜を送る。松田はぼくよりずっと元気だ。

八月十四日 晴

ぼくの体調は回復せず、いつたんマッキンダーズキャンプまでおりることにする。フランシスが僕の荷を分け(十五キロぐらいあつた)、空身にしてくれる。十時半出発、十二時半キャンプ着。しかし具合は良くならず無理に食べたものもどしてしまう。不思議にも、このような時にと持ってきた日本食が食べるのにもつとも抵抗がある。濃いしよう油

ケニヤ山概念図



の味などとてもうけつけず、ビスケットの方
がまだました。

フランスが時々様子を見にきては、その
たびにもつと下におりた方が良くはないかと
いうが、結局またもや翌日まで待つて決める
ことにする。（結果的には彼のいったことは
正しく、ぼくは十三日の時点で即刻下山すべ
きであつたろう。残した計画への未練と、こ
れも高度馴化の過程だろうぐらいに軽く考え
ていた面が今思えがあつた。）

八月十五日 晴後雨後晴

激しく咳が出る。咳をすると胸のあたりに
水がたまっている感じがはつきりとする。ば
くの乏しい高山病の知識からも肺水腫の症状
に間違いないと思われる。体の全体が弱つて
いる。

八時、キャンプを出発するも、自分の体で
はないかのような歩き方、いわゆる千鳥足にな
る。判つてはいる（頭ははつきりしていた
が、うまく歩けない。そんなぼくを見てフラン
シスはさすがに不安を感じたらしく、キャ
ンプに戻つて常駐している「ケニア山レスキ

ューパーティ」のメンバーを二人連れてきた。

この時からリバーロッジに戻るまで、ぼくは
全面的にこの救助隊の世話になつた。彼らの
活動に対する感謝はことばではいいあらわせ
ない。）

隊員二人、松田、フランス、エドワード
が交替でぼくの両脇をかかるようにして歩
を進める。折しも雨になり、泥濘帯に入った
ので苦しいうえに泥まみれ、最悪の行軍とな
つた。

八月十七日

途中で下から登ってきた救助隊員とキャン
プの二人は交替した。二時半、森林帯に入る
地点で残置されていた担荷に乗せられる。樂

ニエリからナイロビへ帰る。安心はしたも
のの敗北感と松田への申し訳なさはやはり
大きかった。

病院で再度検査を受けた。肺の水はほとん
どひいていたことだつた。回復は、発病
した時と同じように劇的だつた。現在も特に
後遺症はない。

高度障害は本当に恐ろしい。これが身にし
みて判つた実感だ。何も知らなかつたといえ
る。若いこと、体力があることは高度障害に
関係がない。元気にK2のベースキャンプまで行つてこられた吉沢先輩の例もある。帰国

ベートな要求も、この一日の後では自然に思
える。言い値通りの、謝礼というにはささや
かな額を進呈する。

五時、ロッジの車でニエリにあるミッショ
ン系の病院へ向う。イタリア人医師の診察を
受け、結局二日間入院した。高度を下げたせ
いかこの日の夕方から食欲が回復する。キリ
スト教系の病院だけあつてスタッフは皆きわ
めて親切で支払いも安かつた。

してから日本の山でも肺水腫発病の症例があることを知った。(「山岳」第七〇年) 僕の場合が典型的であるわけではないだろう。ひとつの一例として認識を深めるうえの参考にしていただければ幸いである。

学生の松田重明、佐藤活郎の両君がこの夏に二ヶ月間程アフリカを旅行してきました。当初の目標はウガンダの奥にそびえるルーウエンヅリ登頂でしたが、結果的には地元の軍司令官の許可が貰えず断念、ナイロビにとつて返しケニア山に転進してレナナ峰に登頂してきました。本号では彼らにその最も印象に残った部分を文章にして貰いました。彼らの行動の概略は以下の通りです。

七月 九日 日本発
七月 一日 ナイロビ着
七月 一七日 ウガンダへ出発
七月 一八日～八月四日 ウガンダ滞在
八月 五日 ナイロビ着
八月 一日～一五日 ケニア山登山
八月 二一日～九月二日 ケニア国内旅行
九月 一〇日 羽田着

フランシスとエドワード

松田重明

広大なケニヤ山の山麓をランドローバーは走った。僕達二人で借り切った車である。ルーエンヅリでは山に一步も踏み込めなかつたので、僕達は少し氣負っていたかも知れない、ケニヤ山は中腹に雲がかかっていて上部は見えない。しばらく走り、ローバーは堀立小屋の前にとまつた。数人の黒人が小屋の前にたむろしている。その中から出て来た若い二人の黒人がフランシスとエドワードであつた。年かさの瘦躯の男がフランシス、ぱっちりした方がエドワードである。彼ら二人を乗せて僕らの車はさらに先へ進んだ。車に揺られながら初対面のあいさつをかわす。年はいくつか、ケニヤ山には何回登つたか、日本ではどこに住んでいるのか、といったありきたりのあいさつだ。しかしお互い探り合うような調子でどうも話がはずまない。フランシ

スは二五才でポーターアンドガイド、エドワードは一八才でポーターである。当然フランシスの方が兄貴株でなにくれとなくエドワードの面倒をみてやつている。車道の終点近くなりようやく話もはずんできた。

「お前達は車の免許を持っているか」とフランシス。

「いいや」「どうして」

「日本じゃ車の免許を取るのに、一〇万円近くかかるからさ」と、一〇万円をケニヤシリングに換算し僕はありつけの英語力をしほり答える。フランシスは目を丸くして驚いた。エドワードはフランシスに遠慮してあまりしゃべらなかつたが、山登りは好きかとたずねたら、好きも嫌いもない、俺が山に登るのは金をかせぐ為さと彼は答えた。強烈な

パンチを食つた感じであつた。やがて車道は終り僕達の登山がはじまつた。

車中で色々しゃべり合つた程度では僕はどうも彼らを信頼しきれなかつた。というのもそれまでの一ヶ月の間ケニヤ、ウガンダを旅行して日本人からヨーロッパ人から、アフリカ人は信用できないからと注意され続けてきたのだ。頭からそうした言葉を信じていたわけではなかつたが、途中でポーターに駄々をこねられ下山でもされたり、なめられて最後に法外な賃金をふっかけられたりしてはたまらない、という具合に絶えず心の底で考えていたのだ。歩き始めるとフランシスは荷が重い事を言葉でもそぶりでもしきりにアピールする。金を節約する為、二人しかポーターを雇わなかつたので確かに規定の一人当り重量をオーバーしていた。しかし僕らはそれを無視しようとした。山に入つて二日目からは佐藤がポーターに対して厳しく出、僕が彼らの要求を聞くという役割分担を決めた。もつとも高度障害が出て下山する時にはそんな余裕は全くなくなつてはいたが。

ケニア山は午後になるときまつて上部に雲がかかり天候がくずれる。一日目も当初予定ではテレキハットまで行くつもりであったが、道程半ばにして激しい雨が降つてきた。ボーラー二人は雨具などなくびしょ濡れである。

フランシスはまだがんばつてはいるが、エドワードはま青な顔色をしている（黒い肌に顔色など出るわけはないのだがその時はそう感じた。）もうこれ以上は歩けないと判断し、僕達は近くの岩小屋に泊まり、彼ら二人は登山口にあるロッジまで下ることになった。フランシスは、翌朝は八時頃までには登つてくるつもりだが、早朝は動物が動き回つていて恐いので連れが出来ぬ時は遅くなるかも知れぬと残して下つていった。僕達は彼の正確な物言いに、これは案外信頼できる男かも知れないと思う半面、八時という約束に関しては半信半疑であつた。翌朝、彼らは二人だけで八時前に登つてきた。

二日目にはテレキハット、三日目にはレナナ峰近くにあるトップハットまで進んだ。割合順調な足取りである。しかしレナナ峰まで

は一般の登山者が沢山登つているのであまり威張れたものではない。一方、二日、三日と行を伴にするにつれフランシスとエドワードの人となりが段々わかってきた。ロベリオやセネシオの群落の中で、トップハットへ続く急な斜面で休けい時間中彼らと話し合つた。フランシスはポーターの賃金が低い事を強調しながら、自分の貧しさを語る。また或る時「お前は結婚しているか」と聞くので、僕は冗談のつもりで「金がないから結婚できない」と答えたことがある。すると彼はひどく僕に同情してくれた。彼もまだ結婚はできないらしいが、ガールフレンドは一人いる。エドワードは苦しくなるとそれを露骨に表情に表わし、調子にのればトットと先に歩くが、調子が悪いとみる間に遅れて行く。ペースもなにもあつたものではない。しかし二人とも陽気で、荷が重いとはいながらも鼻歌を歌いながら歩いていた。無口なエドワードにくらべ、フランシスは僕らによく話しかけてきた。彼の言葉をきき、そぶりを見していくにつれ、彼はなかなか食えない男である事がわかつてき

た。二日目の晩、テレキハットに泊っていた。時のことである。同宿のフランス人のグループが枯木を集めて焚火をしていた。それを見たフランシスは、国立公園の規則をたてにとつて彼らをやり込め始めた。腹の虫の居所でも悪かったのかも知れない。かなり早口でまくしたてていたので何を言っていたのか良くは分らなかつたが、理路整然とした振りで、時々下の管理事務所へ報告するぞという恫喝も混えていた。フランス人達は全く反論できず結局焚火を消した。後で僕が、「ちょっと厳しすぎるのではないか」と言つたところ、彼に焚火禁止の理念を滔々と説かれ、もし焚火の跡をレンジジャーにでも見つかったら、下手をすると我々の責任にされ罰金をとられかねない、だから止めたのだといふ。僕もこれには全く反論できなかつた。こう書くと彼が白人を目の敵にしているように思えるが、トップハットでは小屋の前を通り過ぎる白人登山客に色々と親切にアドバイスしていた。

達二人は猛烈な頭痛に襲われた。高度は五〇〇〇m近い。完全な高度障害であった。吐き気はするし、体はだるいしで身動きも取れない様な状態であった。計画ではこのトップハットからケニヤ山主峰の周辺を一周し、往路を戻る計画であった。ルーウェンゾリ登山は失敗しているし、戻りたくはなかつたが、翌日になつても体調は回復せずともかく少し下のマッキンダーズキャンプまで下り、体調の回復を待つことにした。この時にはフランシスもエドワードも実に良く働いてくれた。重い重いと言つていた自分達の荷の上に更に僕達の荷物まで運んでくれた。高度を下げるとしばらくして僕の体調は回復してきた。しかし佐藤の方は回復はおろかますます悪くなる様だった。彼は頭痛が始まつて以来、ほとんど物を食べていない。食べてもすぐ吐いてしまう。後から考えるとこの時、一気にふもとまで下つた方が良かつたのかも知れない。その日はここで一泊すれば体調も回復するかも知れないと考えていた。このまま下山してしまいたくはなかつたのだ。しかし翌朝を迎えた

ても佐藤の具合は一向に良くならない。結局ふもとまで下ることにした。この間、フランスはしきりに佐藤のことを見つけて、回復しないならすぐ下山しようと何度もアドバイスしてくれた。僕達は結果的にはそれを無視したことになる。

キャンプは出発したもののみとまでの行程は大変であった。佐藤はまともに立つていられない様な状態である。僕達は最後まで自力で下るつもりだったが、そんな状態ではとても無理だった。結局、ケニヤ山のレンジャーに助け降してもらった。フランシスは彼自身頭痛がすると言っていたが、僕達の分の荷まで背負い最後まで助けてくれた。レンジャー達に叱咤され途中から降り出した雨にぬれながら、ようやく助けに来てくれたランドローバーに乗った時には僕達はもうくたくたであつた。

あつた。
ランドローバーは往路を下つて行つた。敗
退したと言う感傷にひたつていよいとまもな
かつた。再び山麓に戻り、しばらく走つた所
で車は止り、フランシスとエドワードはそこ

で降りた。僕は車中で氣のきいた別れの言葉を言つてやろうと考えていたが、いざとなると胸が詰つて何も言えなかつた。再び車は走り出し、互いに手を振るだけで何ともあつ気ない別れであつた。

こうしてケニヤ山の思い出を書いているとまたフランシスとエドワードに会いたくなつてくる。二人ともいい奴だつた。彼らに対して僕達は最初色々気を回しもしたが、最後には全く彼らに頼つてしまつた感がある。彼らはトップハットから下る時、自ら進んで僕達の分の荷まで運んでくれた。レンジャーを呼ぶ手配をしてくれたのも彼らだ。金を払つているのだから当たり前だと言つてしまえばそれまでだが、僕達と彼らの間に何らかの心つながりがあったと我想つた。僕達はケニヤ山で貧しいけれど立派に生きている二人のアフリカンに会つた。



—甲斐駒ヶ岳追悼碑—

(金子 五二・九・三)



会報、第五一号をお届けします。

× × ×

大先輩の吉沢さんと、一番若いO.B.? (五年生) の松田、佐藤両君の海外行の文章を一度に掲載できることをうれしく思います。

× × ×

冬山のシーズンです。学生諸君は西大谷尾根よりの剣岳、立山登頂を目指し出発しました。会員諸兄も良い山行をお楽しみ下さい。

× × ×

今年度は予算の都合上、会報は年間三回発行となつておりますが、担当としては何とか例年通り四冊発行致したく、会計の加藤君と協力してやるつもりですので、原稿の方は宜しくお願いします。

(藤本 敏行)

編集後記



— ケニア山西面 1977. 8. 14 朝 松田重明 撮影 —

針葉樹会報 復刊第 51 号

発行日 1977年12月

発行人 針葉樹会 会長 望月達夫

編集人 藤本敏行

印刷所 大栄印刷
